

# 学生の主体的参加を高める短期大学入学準備プログラムの開発

渋谷 郁子・岩田 昌子・杉原 亨・石川 拓次・前澤 いすず

キーワード：主体的参加（エンゲージメント）、入学前教育、接続教育、プログラム開発、短期大学

## 1. 問題と目的

大学への学生の主体的参加（エンゲージメント）は、大学教育のアウトカムを評価する研究の中で、その重要性が指摘されてきた（小方，2008）。また、学生の主体的参加を高めるため、学生参加型授業、双方向型授業、協同学習型授業などの実践が重ねられてきた（e.g., 小田・杉原，2010）。こうした先行事例の多くは4年制大学におけるものだが、短期大学においても、学生の主体的参加の促進は、差し迫った課題である。

短期大学は「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は实际生活に必要な能力を育成する」（学校教育法第108条）ための組織として規定される。平成23年度からは、短期大学設置基準において職業指導に関する取り組みが義務化され、職業教育を一層充実していくことが求められるようになった。2年の修業年限の中で、生徒を学生にし、さらに職業人にして社会に送り出すことが、短期大学に課せられた役割であるといえよう。これらを実現していくには、専門的知識の習得もさることながら、主体的に学び、参加するという姿勢を、学生の中に培っていくことが欠かせない。自らはたらきかけるという行動様式を身につけない限り、職業人としての自立を達成することは難しいからである。

しかしながら、短期大学の学生には、入学直後から、資格取得を見込んだ密なカリキュラムをこなしていくことが求められる。本来であれば、主体的参加の促進は、初年次教育等を通じて段階的に行われるべきだと考えられるが、短期大学にはその時間的余裕がない。

そこで本研究は、この問題を緩和するため、短期大学入学前の時期に着目し、大学への主体的参加を高める入学準備プログラムの開発を試みた。開発にあたっては、入学後のリメディアル教育、初年次教育、キャリア教育の内容を考慮し、入学後の教育内容との関連をもたせるよう努めた。以下、鈴鹿短期大学で、平成25年度入学予定者を対象として行われた入学準備講座について報告する。

## 2. プログラム開発の背景

### 2・1. 大学の特色

鈴鹿短期大学は1学科3専攻（生活コミュニケーション学専攻、食物栄養学専攻、こども学専攻）、1専攻科（健康生活学専攻）を備えた、地方私立短期大学である。2年間の学びを通して、生活コミュニケーション学専攻では養護教諭2種免許状、食物栄養学専攻では栄養士免

許証および栄養教諭2種免許状、こども学専攻では幼稚園教諭2種免許状および保育士証を、それぞれ取得することができる。ほかに、音楽療法士2種の資格も取得可となっている。1学年あたりの定員は150名（生活コミュニケーション学専攻40名、食物栄養学専攻40名、こども学専攻70名）で、在籍学生の90%以上が県内からの入学者で占められている。

専攻によってやや状況が異なるが、いずれの専攻も資格取得を目指すため、必然的に授業編成は過密にならざるを得ない。ほとんどの授業が専攻別あるいはクラス別に行われており、学生はいつも同じメンバーと授業を受けることが多い。また、学外実習やインターンシップでの経験が、資格取得や就職への意欲を左右する傾向がみられる。入学当初より所属ゼミナールを定め、担当教員が、公私にわたって学生をサポートする制度を採用している点も特徴的である。

## 2・2. 学生の特色

授業スケジュールが多忙なこともあり、ボランティアやサークルなどの課外活動は、一部を除いて、さほど活発とはいえない。個々の学生は素直だが、主体性に欠ける姿も散見される。

また、学生数の多いこども学専攻では、同学年の学生同士であっても互いの名前を知らず、言葉を交わすことのないまま卒業を迎える場合もある。そうした状況も手伝ってか、しばしば、学生間のコミュニケーションスキルの未熟さが感じられる。一方で、こども学専攻の卒業生に短大生活の感想を尋ねたところ、多くが「友達が支えだった」「仲間がいたから脱落せずに資格取得できた」と答えていた。これらより、仲間関係が短期大学での学習達成に大きく影響したと、実感している学生も多いと考えられる。

## 2・3. 過年度の入学準備講座の振り返り

鈴鹿短期大学の入学準備講座は、平成21年度入学者から実施され、入学者の大学適応の足がかりとなるよう、毎年その内容に改良を加えてきた。その一環として、平成23年度の入学予定者を対象として、入学準備講座の効果を分析したところ、入学予定者と教員が交流する機会が不足していた可能性が示された（岩田・渋谷，2013）。また、「教員との付き合いにおける困難さ」が「大学生意識の獲得」「大学文化の理解」と有意な負の相関関係にあり、教員との関係がうまく形成されない場合には、大学生意識の獲得や大学文化の理解が進みにくいことが示唆された。坂田・佐久田・奥田・川上（2007）によれば、教員との親密化は、大学生活の満足感にもつながっているという。大学への主体的参加を高めるプログラムを開発するにあたっては、この点の改善が欠かせないと考えられる。

## 3. プログラムの内容

上述したように、大学と学生の特色を考慮し、これまでの入学準備講座の反省点を踏まえて、鈴鹿短期大学で学生の主体的参加を促進していくためには、以下の2点を入学準備プログラム開発の目標に置く必要があると考えた。a) 広がりのある仲間関係の構築、b) 大学環境（教職員、施設、授業時間など大学特有の文化）への親和感情の醸成。

広がりのある仲間関係作りの契機となるよう、入学予定者を出身校や進学先の専攻が異なる

者を組み合わせた小グループに振り分け、全講座について同じグループで活動することにした。また、これらのグループ活動を円滑に進めるためのファシリテーターとして、各専攻の1年生数名を配置した。

新たに開発した基礎講座（1）～（3）の詳細な目的および方法を表1にまとめた。入学後のリメディアル教育、初年次教育、キャリア教育につなげるため、いずれの講座も、単なるアイスブレイキングや友達作りに留まるのではなく、高校までのスタディスキルを補完しつつ、新たに大学教育に必要なアカデミックスキルを意識させるような内容を盛り込んだ。入学準備プログラム開発の全体的な枠組みを、図1に示した。

基礎講座（1）は、新しい仲間との出会いと交流を、ワークを通じて体験する場として設定した。入学予定者が事前に記入した、自己に関するエピソードシート（図2）を用いて行う。このエピソードシートには、入学予定者に自己省察を促すほか、学生指導やキャリア支援に役立つ資料を収集するねらいもあった。

基礎講座（2）は、「大学で学びたいこと」をテーマに、自分の主張に理由をつけて文章を作成する方法を講義し、それをもとにグループでお互いの考えを話し合う、講義とワークを組み合わせた講座である。入学後のアカデミック・リテラシー教育に資するほか、大学で学ぶための目的意識を明確にする機会になると考えた。また、講義型の授業を体験することで、大学の授業の雰囲気や時間の長さに触れることもできると考えた。

基礎講座（3）は、グループで一人の教員について調査や取材を行い、その情報をシート（図3）にまとめて全体に発表するという講座である。過年度の入学前講座の反省点であった、教員との交流の不足を補い、教職員や施設などの大学環境に親しみをもたせることをねらった。取材対象となる教員は、3専攻の専任教員の中から満遍なく振り分け、入学予定者が自分の進学先専攻の教員だけではなく、他専攻の教員とも広く交流できるようにした。また、学内を歩き回って主体的に情報を集め、それを練り上げて発表を行うまでの一連の作業の中で、仲間との関係を深めながら、短大生活に必要な情報収集の方法に関する知識や、学生としてふさわしいマナーなどを伝えることができると考えた。さらに、教員の話聞いてメモをとる、教員に質問をするなど、入学後の学習に欠かせないスキルについても同時に意識させることを目的とした。

表1 各基礎講座の目的と方法

	目的	方法
基礎講座 (1)	これまでの自分を振り返り、自己を表現する。	・自分について、エピソードシートに事前に記入する
	新しい仲間（同専攻、他専攻）に出会い、互いに認め合える関係の土台をつくる	・エピソードシートを下敷きに、付箋を用いてグループ内でお互いを知り合う
	キャリア教育・支援および学生支援につなげる	・エピソードシートの複写をキャリア支援担当者とゼミ担当者に渡し、履歴書作成時などに活用する
基礎講座 (2)	自分の主張を、他者に正確に伝えるための文章の書き方を知る	・意見と根拠の構図が重要であることを、講義形式で学ぶ
	大学で学ぶ目的を考える	・「短大で学びたいこと」をテーマに、論理的文章を実際に書いてみる
	新しい仲間（同専攻、他専攻）に出会い、互いに認め合える関係の土台をつくる	・グループ内で見せ合って、話し合う
基礎講座 (3)	必要な情報を収集、整理し、的確に他者に伝える経験をする	・一人の教員について、調査や取材を行い、その情報をまとめて全体に紹介する
	学生としてふさわしい態度で教職員とコミュニケーションをとり、教職員や大学施設について知る	・学内地図を見て教員の研究室を訪ね、インタビューを行う ・ノックしてから入室することや言葉遣いなど、基本マナーを伝える ・情報を得るため、事務局を訪ねる ・食堂で上級生から情報を聞き取る
	シラバスや掲示板を見る行動を意識づける	・掲示板から、教員の研究室を知る ・シラバスから、教員の担当授業を知る
	仲間と関係を深め、認め合える関係の土台をつくる	・グループで役割分担して調査計画立案・取材し、情報を整理して発表する

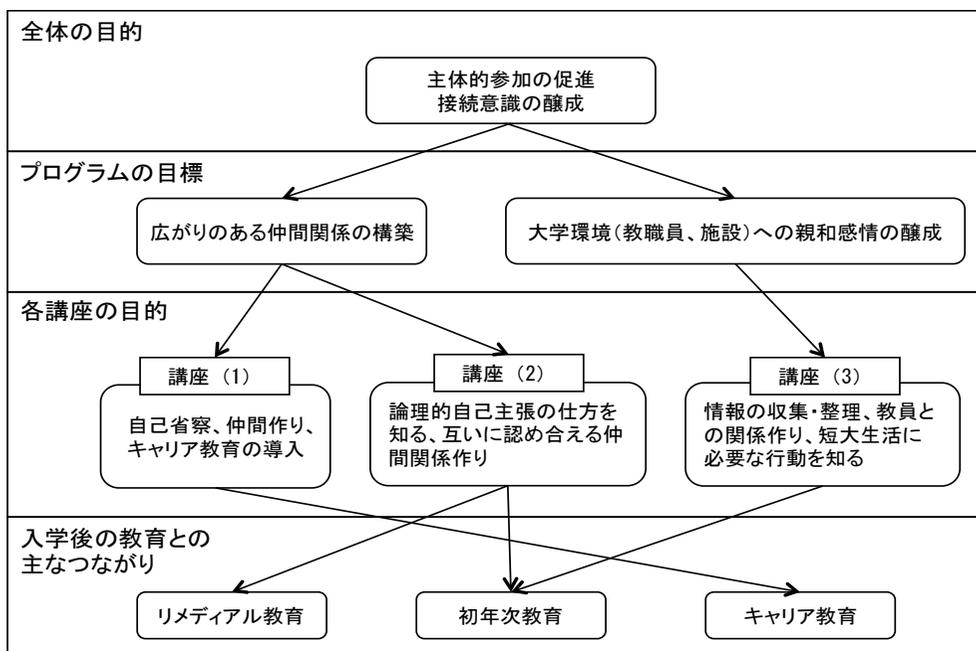
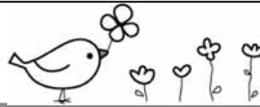


図 1 入学準備プログラム開発の枠組み

#### 4. プログラムの実施

平成 25 年度入学予定者を対象とした入学準備講座は、12 月、2 月、3 月と 3 回にわたって実施された（表 2）。12 月は、こども学専攻のピアノガイダンスのみが、2 月は専攻別のプログラムが、それぞれ行われた。新たに開発した基礎講座（1）～（3）は、3 月 25 日、26 日の 2 日間に、9:00～12:10 の時間帯（1～2 限）を使って実施された。基礎講座（1）（2）には各 1 コマ、（3）には 2 コマが割り当てられた。3 月 25 日は 133 名（全入学予定者の 95%）、26 日は 130 名（全入学予定者の 93%）の入学予定者が基礎講座に参加した。

なお、基礎講座（3）には、18 名の教員が取材対象として参加した。これは特別任用教員を含めた常勤教員の約 70%に該当する数である。また、一部の事務職員の参加も得られた。このため、講座実施日の 3 週間前に全教職員を対象とした説明会を開いて、講座についての理解を求め、大学全体で入学予定者を迎え入れる準備を行った。また、ファシリテーターの上級生に対しても、実施日の 1 週間前に講座説明会を開き、講座の概要と期待する役割を伝える機会を設けた。プログラム実施中の様子を図 4～6 に示した。



# 自己紹介エピソードシート

専攻[ ]

名前[ ]

あなたについて教えてください！

好きなもの・人  
(本・マンガ・雑誌、映画・アニメ・ドラマ  
音楽、食べ物、芸能人 etc)

自分の性格  
(血液型、星座、動物にたとえると etc)

自分の良いところ・特技など

※学校生活に限りません	中学校時代まで	高校時代
楽しかったこと		
がんばったこと		
うまくいかなかったこと		

図2 基礎講座(1)で用いたエピソードシート

## 教員プロフィールシート

グループメンバー

教員名	専攻
専門分野	
主な担当科目（2つくらい）	
趣味	
人柄	
先生からの新入生へのメッセージ	
取材した印象	



図3 基礎講座（3）で用いたワークシート

表2 入学準備講座の概要

日時	生活コミュニケーション学専攻	食物栄養学専攻	こども学専攻
平成24年 12月26日			・音楽講座（ピアノガイダンス） ・課題曲の練習成果の確認
平成24年 2月2日	10:00	学長講演	
	10:30	・アイスブレイク	・調理を通してのコミュニケーション作り
平成25年 3月25日	13:00	・専攻での学びについてのガイダンス ・栄養士の社会での役割と活躍の場を知ろう	・幼稚園教員、保育士の仕事についてのVTR視聴  ・専攻での学びについてのガイダンス ・保育者の資格をとるために必要な心構え、心得など （※保護者にも参加を求める）
	9:00	基礎講座（1） 自己紹介 基礎講座（2） 論理的文章の書き方	
平成25年 3月26日	13:00	・救急処置	・自分の食事を評価しよう ・先輩から話を聞こう
	9:00	基礎講座（3） 教員への取材	
平成25年 3月26日	13:00	・短大生活の流れと資格取得について	・ピアノ発表会（①グループ） ・上級生を交えたふれあい遊び（②グループ）
	13:00	・調理を通してのコミュニケーション作り	・ピアノ発表会（②グループ） ・上級生を交えたふれあい遊び（①グループ）



図4 基礎講座（1）：グループ分けした指定座席に着席した様子（写真）



図5 基礎講座（3）：教員の研究室で取材する様子（写真）

図6 グループ活動を促進する上級生ファシリテーター（写真）



## 5. 参加者によるプログラムの評価

### 5・1. 実施直後の評価

各基礎講座が終了した時点で、質問紙を用い、満足度、難易度、有益性、新規性の4基準について5段階で評定するよう参加者に求めた。各基準における尺度は、満足度が「5. とてもよかった」「4. よかった」「3. どちらともいえない」「2. 悪かった」「1. とても悪かった」、難易度が「5. とても簡単だった」「4. 簡単だった」「3. どちらともいえない」「4. 難しかった」「5. とても難しかった」、有益性が「5. とても役立ちそう」「4. 役立ちそう」「3. どちらともいえない」「2. 役立たなさそう」「1. まったく役立たなさそう」、新規性が「5. とても新しかった」「4. 新しかった」「3. どちらともいえない」「2. あまり新しくなかった」「1. まったく新しくなかった」であった。

結果より、どの講座も満足度は高かったが、他の講座と比べて講座(2)は難易度の点で、講座(3)は有益性や新規性の点で、他の講座より高く評価される傾向にあった(図7)。講座(2)の難易度については、一部に講義が組み込まれたことで高めに評価されたのではないかと思われるが、「2. 難しかった」と答えた学生が全体の30%程度であったことから、難解過ぎるということはなく、最適な難易度であったのではないかと考えられる。また、講座(3)の有益性や新規性は、大学教職員や大学施設に対する目新しさのほか、入学予定者の側が積極的に情報収集をしてまとめるという活動の能動性について、高く評価されたのではないかと考えられる。さらに、ワークの中で学んだ内容が、入学後の生活に直結していると感じたことで、有益性を感じる度合いが高まったのではないかと推察される。

続いて、各講座に対する感想を自由記述で尋ねた。講座(1)については「他の専攻の人とも話ができて、友達の輪が広がったように思う」「他の専攻の人の話も聞けて、より一層やる気ができました」「人見知りだが、エピソードシートを使って会話が続いた」などのコメントが得られた。

講座(2)については「段階に分けて考えると、意見がまとまりやすくなった」「自分が短大でしたいことを再確認できた」「周りの友達の学びたい内容や意欲を知ることができた」などのコメントが得られた。

講座(3)については「専攻の違う先生のこと知り、話が聞けて良かった」「先生の名前と顔がすぐに覚えられそうに感じた」「先生たちが自己紹介していただけと思ったら、自分たちで取材して発表ということを知っておもしろいと同時に楽しかったです」「昨日より一層、グループの団結力が高まった」「集団で力を合わせて課題に取り組む楽しさがわかった」「大学の中を歩き回って施設のことがわかった」「情報収集、まとめ、プレゼンの仕方など、多くを学んだ」などのコメントが得られた。また、上級生ファシリテーターについて、「先輩たちが優しく、話がしやすかった」「先輩の明るい対応がよかったです」「実際に体験されてきた話が聞けてよかった」などのコメントが寄せられた。

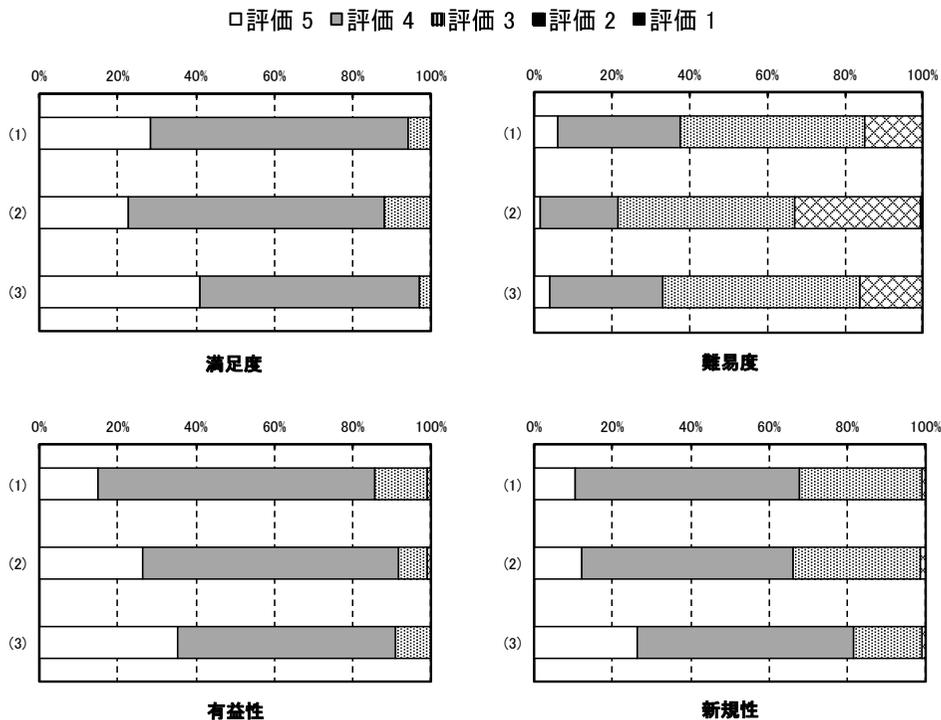


図7 参加者による各基礎講座の評価

一方、今後の改善が求められるコメントもあった。講座(1)については「90分間は長かった」「質問しにくい答えの時は話が続かなかった」など、講座(2)については「文を書くのが難しかった」「あんまりできた感じが無い」など、講座(3)については「はきはき質問ができなかった」「学校が広くて迷いそうになった」などである。これらについては、上級生ファシリテーターや教員による補助を拡大するなどの手立てをとり、参加者が一定の達成感を得ることができるよう配慮する必要があるだろう。

### 5・2. 入学後の評価

前期 Semester 終了後の8月下旬に、全専攻の学生を対象として、3月の入学準備講座を振り返ってその効果を尋ねる質問紙調査を行った。「入学準備講座は役立ちましたか。」という質問項目について、「とても役に立った」から「まったく役に立たなかった」までの5段階で評定するよう求めた。入学者全体の82%に該当する114名から回答を得られた。

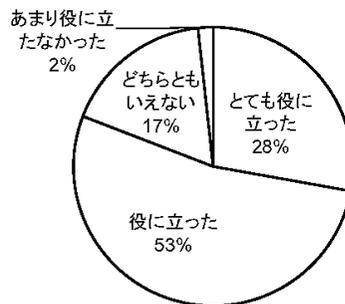


図8 プログラムの効果に関する参加者の評価

その結果、「とても役に立った」「役に立っ

た」を選択した回答者が全体の8割を占めた(図8)。このことから、学生が、入学後の教育と実施プログラムとのつながりを実感していることが示唆された。プログラム開発にあたって、入学後のリメディアル教育、初年次教育、キャリア教育との接続を意識したことで、結果的に、大学で身につけることが求められるスキルを学生に意識させ、大学での学びに対する準備性を高めることにつながったのではないかと考えられる。

## 6. 開発した入学準備プログラムの特性

質問紙調査の結果から、開発した入学準備プログラムは、おおむね有効に機能したといえる。この理由として、3講座に段階的つながりをもたせたことが考えられる。3講座の段階的つながりとは、講座(1)(2)で「自分を知り、仲間を知る」ことを体験した後、講座(3)で「仲間と協力して一つのことを成し遂げる」活動に移行したことである。これにより、初めて出会う相手とのコミュニケーションに不安を感じていたとしても、段階を踏んで、無理なくプログラムに参加することができたのではないかと考えられる。

また、グループワークを主にしつつ、講座(2)のように、講義を行う時間も組み込んだことで、大学を学習の場として意識させながらも、90分授業という新たな学習形態への不安や嫌悪感を軽減させられたのではないかと考えられる。

最後に、教職員からの反応として、キャリア教育への接続が、学科とキャリア支援課の連携を深める契機となったとか、他専攻の学生との交流が、専攻の壁を取り払う一助となったなど、いずれも肯定的な感想が聞かれた。

## 7. 今後の課題

以下の3点を挙げる。a) プログラムの内容が、本当に主体的参加を高めるような内容になっていたのか、入学後の大学生活への適応に焦点を当てて検証する。b) プログラムがどのような部分に実際に効果をもたらしたのか、友人関係や学習状況など複数の側面に関する客観的指標を用いて検証する。c) 鈴鹿短期大学の学生により適合した内容に改良していくため、学生の特性やこれまでの学習到達度などを、客観的指標によって明らかにする。

## 引用文献

- 岩田昌子・渋谷郁子(2013) 保育者養成過程に在籍する短期大学生の入学前教育の受け止め方—大学適応との関係から—, 鈴鹿短期大学紀要, 33, 201-212.
- 小田隆治・杉原真晃(2010) 学生主体型授業の冒険—自ら学び, 考える大学生を育む—, ナカニシヤ出版.
- 小方直幸(2008) 学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム, 高等教育研究, 11, 45-64.
- 坂田浩之・佐久田裕子・奥田亮・川上正浩(2007) 新入生オリエンテーションにおける獲得

感と大学生活満足感との関連性について. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 45-54.  
総務省法令データ提供システム. <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22H0026.html>  
(アクセス 2013 年 7 月 4 日).

## **Development of a Pre-Entrance-Education Program for Enhancement of Students' Active Participation in Junior College**

**Ikuko SHIBUYA, Masako IWATA, Toru SUGIHARA, Takuji ISHIKAWA,  
and Isuzu MAEZAWA**

The purpose of this study was to develop a pre-entrance-education program for enhancement of students' active participation in junior college. The program was developed in accordance with remedial education, first year experience, and career development. These are considered to play an important role for student success in junior college. Specifically, 3 modules were held in March 2013, each of which included several small group workshops. The results of the questionnaires showed that the program could be relatively useful and novel for the participants.